



44  
8099  
8  
(2)

新古今和歌集卷第十一

戀歌一

顔不知

孫人あはれ

よき心の見てもやとあじろくやばはれあはれ白雲  
をよき心とあじろくやとあじろくやばはれあはれ白雲

在原業平 人磨

是の山田のうらやまをかくかきの下えれつわらふらん  
はなうらやまをかくかきの下えれつわらふらん

女よほつらうけり

在原業平 初長

まはれおほくさむらひのよき衣をたのむるはつらうけり  
まはれおほくさむらひのよき衣をたのむるはつらうけり



中納更衣よ清くも

延喜行

紫衣文也くろあ福も妙くそ人をなほいたあ川

影もく次

中納言兼輔

みれくく口えなうく泉河の尺さそり無くらん

平定文部言合ふ 坂上元則

地のうや重巻よわつはあれありとほそてあぬあ

人れあつうてゆけりあ事ふらう女よ清くは

藤原高光

後天て思ふあうちうくあそ定もたうは風を吹さる

九条右大臣のびとあふくあてはくしき

西文前大臣

年月の身にして色あましむをわのゆすもある

や

大納言後賢母

とゆふ小春とくはく人あまねとすくろと秋のあ

天曆以時言合ふ 中納言朝忠

今ほふあせうく秋を思ひみこりふのこをわらん

あしそ女よ清くも 大宰大臣高遠

みこりこれ治りあうさうあもあうあうにぬるは

いっからわらあうあうはさむ女





身子院侍哥

お目えとつらつら日影  
正月面より風吹雪より日女よほつり

福徳公

春風吹雪もさあはる  
そしつかかりこそせぬ女

歎あつと

曾孫奴忠

かき雪よりし福とほつり  
也事をもぬ女にほつり

二月とらに續ゆ

和泉式部

花とふ草花のふさく  
新しう春

與風

霜乃とふつとふ見  
中納言家持

秋の枝もさゆふ  
藤原高亮

秋風よきて物の心  
おのころのあつと

おのころのあつと  
範園大文臣

わらゑも、まはなを、あてて、まう、けり、たけ、な、ま、紅葉、小、花  
相、言、前、奇、合、よ、久、忠、意、と、い、ぬ、と、い、ぬ

持政太政大臣

名、上、如、の、れ、神、杖、方、り、如、道、と、い、ふ、は、は、て、と、露、も、と、く、ま、つ、を  
山、野、ま、ま、合、よ、忠、意、乃、の、を

太上天皇

赤、意、は、精、乃、ち、く、兼、よ、り、の、時、毎、あ、つ、ま、も、神、の、名、よ、い、て、あ  
百、首、乃、ま、り、一、れ、よ、か、る、ゆ

前大僧正慈圓

日、の、慈、和、と、み、ぬ、乃、た、あ、の、ひ、て、と、高、う、け、く、如、風、と、い、は、り

あ、よ、あ、合、一、ゆ、り、乃、り、に、な、慈、乃、の、を  
持、政、太、政、大、臣

う、し、精、乃、を、く、如、よ、れ、に、ま、り、れ、露、乃、あ、ぬ、神、と、い、の、ま、

寐蓮法師

思、い、あ、道、を、神、よ、ま、と、い、く、乃、く、も、く、も、く、や、物、と、い、ふ、人、と、い、ふ、

太上天皇

水、言、能、く、と、も、り、こ、も、久、慈、と、い、ふ、と、い、ふ、乃、の、ゆ、り、ゆ  
な、い、つ、る、乃、の、ま、り、ま、り、し、ゆ、の、如、乃、あ、ぬ、乃、た、く、れ、な、ん、ん  
百、首、歌、中、小、慈、意、乃、の、を

式子内親王





廿月又日馬内侍下りけりうらま

前大納言の任

かきお決りての由りあやまきりてのたふす物ありけり

せり

馬内侍

さきとてはるが御下りけりてのたふす物ありけり

兵衛佐子ゆきりてはるが御下りけり

てはるが御下り

法性寺入道前持及大政大臣

部公移りてはるが御下りけり

せり

内侍

かきお決りての由りあやまきりてのたふす物ありけり

はるが御下りけり

公のたふす物ありけり

影の御下り

伴物

足る御下りけり

難波の御下りけり

人磨

かきお決りての由りあやまきりてのたふす物ありけり

ふりて人磨

いしはるが御下りけり

東海の御下りけり



清見浦よりのうらけむらぬあめをたにむら

歌不記

源景明

あつしをぬきふしうら白浪のまの物さよふさあひる

貫之

是引り山にたきまじりて波のうらさるていそりま  
りてあはれさるていそりてあはれさるていそりま

坂上是判

と麻ふと交れり葉たをさるていそりてあはれさる

曾孫叔忠

蚊車あつと書ふてあはれさるていそりてあはれさる

ゆらけ波のうらあつとさるていそりてあはれさる

多羽院はつとあつとさるていそりてあはれさる

いと後約りふ  
控中納言時

をい風よりのあつとさるていそりてあはれさる

百首あつとさるていそりてあはれさる

わらとたけあつとさるていそりてあはれさる

歌不記  
式子内親王

あつとさるていそりてあはれさる

控中納言長方

あつとさるていそりてあはれさる



新古今和歌集卷第十二

恋歌二

百首一首子とてしゆりし小宮雲恋

皇太后之皇女後成女

下もこし思ひきし娘をふれ給ひてはて我をふりて

攝政大臣家百首一首合小

藤原定家朝臣

あけのさゆはれし火をいそぐにやうの海を

百首一首とてしゆりし恋歌

攝政大臣

恋歌のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

恋のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

方火に入ぬ様の事ありて神の政のふりにし

やうのしゆはれし火をいそぐにやうの海を

後頼朝臣

恋のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

恋のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

あけのさゆはれし火をいそぐにやうの海を

大將のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

恋のしゆはれし火をいそぐにやうの海を

攝政大臣

毛の波かよ雲のり花のり時雨にれをきくに色かゆと  
恋ああやうこいふ人ゆるり

後徳大寺丸大臣

かへたはれよをよとせ山をゆく水乃草なる事は

殷富の院太補

もくもくや思ふはてのこはえ花中なる井のち<sup>下</sup>り

近忠院四哥

新しものちをゆきいろやんあはれくしむい

刀目もはらぬ恋し海をよるゆるり

花園丸大臣

今もぬ恋よりの月をいれともみり火よこは波なること

類一 花と 神祇伯顯仲

物なよといふぬをらふのよもいふことと天神のま

忠恋乃をよ 清浦の臣

人言とくはれし物も思ふはてとふ昔乃くく丸のきり

和方市奇合し忠恋乃をよ

雅也

きし録し志れ方山の嶺をよかゆらんの恋もあは

子文目番方合し 丸忠の普通光

かきりあはれなるあはれ方しむもはらぬ紫のちを露を



前大納言隆房中納言の御方にて近馬場においで  
乃同様に御方より物入御方より女車より御方より  
寺より御方より先を後と知あつた御方にて御方より御方より  
也

前大納言隆房

いふ御方にて御方より御方より御方より御方より御方より  
子御方より御方より御方より御方より御方より御方より

左衛門督通光

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

皇太后宮大夫俊成

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

水宮御方より御方より御方より御方より御方より御方より

右大臣俊成

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

藤原忠定

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

皇太后宮大夫俊成

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

入道御方より御方より御方より御方より御方より御方より

乃御方より御方より御方より御方より御方より御方より  
御方より御方より御方より御方より御方より御方より

右大臣俊成



あつむろ霧しとこびしふる地なりし神をさうてとてん

女よほつらうしきり 藤原義孝

しゆまへの命をさくぬき申ふつらぬかひをたすむる

宗徳後よ百首言ふをさしけりありとて

大炊師門右大臣

わの意ら来れおとれくさあこゆき物そてまのほそりお

入道お言白歌よ百首言ふおたのきり時ありぬ意とい

ぬりよ 存永基輔右大臣

いふあつむろをくけし此海はうへをくぬあつむい

夕意といふをも續けり 藤原季方

きり不嫌あつむろいふやたつたつりそり巻らうとていふ

海を意といふもつらうとて

定家右大臣

浪たれあつむろ神よ吹はる風の方をよほれとていふた

杉政大臣家言合よとていふ

実蓮法師

けりそをあつむるなりは若き河くろくふとていふた

子言百首言合ふ 杉政大臣

あつむろよまるといふと若らほせりけり来らうとていふ

百首言合ふ一付 二降院續政



關河<sup>中</sup>忠孝と事と 正三位卿

忠孝より事と事は世より一もせよと教はるるに  
と云ふは世より忠といふ事と事と事と

賀茂重政

その先もよりけしむと事と事と事と事と事と事と  
抄政大臣家百首并合よ

中文大臣家房

あまはるしと任吹舟等にあつたも事と事と事と事と事と

家隆卿臣

あまはるの<sup>煙</sup>船も事と事と事と事と事と事と事と事と事と

名立忠と事と事と事と事と事と事と

權中納言俊忠

名立忠と事と事と事と事と事と事と事と事と事と  
百首并合に忠の事と 権明親王

右束の普通具

我忠にあまより事と事と事と事と事と事と事と事と事と  
水宮殿忠十六首并合小春意乃事と

皇太后宮大臣俊成女

あまはるの事と事と事と事と事と事と事と事と事と

冬恋

定家朝臣

床の敷さくら此も春さくらいぬしすいそとぬらん  
栲波左政大臣家百首万合よ勝恋

五家朝臣

此も春さくら此も春さくらいぬしすいそとぬらん  
うらみゆく春恋といふはなとのこもつうまらば

藤原秀純

神のうぬに鞋中月おとほはてしよ花よめてもこのよ

久恋といふは

越前

夏引のていしは春の道とくもそとぬあひいよじりあ

家百首万合一約けり小新恋といふは

栲波左政大臣

いそとぬ海よちりてき新川神小むらり物なみん

定家朝臣

自とぬおららけりさのせ山たのり鏡もよはれ文も

片思はなと

皇太后宮大夫俊成

うらみゆく秋さふいし物伊とすうとけりたけり心と

歌しり

栲中細云長方

新のめんちうらみ春といふあてあすは所と合いそ

殷面院太博

あそむぬ余とをたをふとけつて行くあそむまうしよとて

八條院高倉

つれもぬれぬ心とていふかたじけなくも恋もあやうとてん

西村法師

かふと好むとてふあつと命をあつと人なむいふとて  
なむとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
はつと

新古今和歌集卷第十三

戀歌三

中宮白かろしとあゆむとあつと

儀同三司母

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

今もそいふかたなりてあし毎にうつらうつら

廣義云

夫れをて逢ふかたを思ふを言ふを命なりけり

百首身中よ

式子内親王

はなはたかたを思ふかたを思ふかたを思ふかた

中におゆるり時其後かたを思ふかたを思ふかた

物思ひかたを思ふ

源正清卿臣

新しきかたを思ふかたを思ふかたを思ふかた

新しきかた

西行法師

あまたの命を思ふかたを思ふかたを思ふかた

三條院女院人丸道

今もそいふかたなりてあし毎にうつらうつら

皇風

あまたの命を思ふかたを思ふかたを思ふかた

實方朝臣

中におゆるり時其後かたを思ふかたを思ふかた

あまたの命を思ふかたを思ふかたを思ふかた

伴野

あまたの命を思ふかたを思ふかたを思ふかた

和泉式部

あまたの命を思ふかたを思ふかたを思ふかた

枕ふきつゆふとくしにむらさきの春の草花  
今物いしめて 馬内侍

春てもふかたぬうたぬあそびのしらべの  
女ふけうけり 藤原範永の后

しつかたはなれはくしをたてし  
類一す 高倉院の后

そとよりしむねむいそとけりもあはれ  
初會恋のむと 後頼朝の后

あはれをのこしむねむいそとけりもあはれ  
類一す 高倉院の后

かりたにうたふくしむねむいそとけりもあはれ

人あはれむねむいそとけりもあはれ  
相模

あはれむねむいそとけりもあはれ  
類一す 高倉院の后

あはれむねむいそとけりもあはれ  
伴

あはれむねむいそとけりもあはれ  
九月十日あはれむねむいそとけりもあはれ  
あはれむねむいそとけりもあはれ

大宰府教道親王

娘乃軒此の月の家まに屋すいひそりあへる  
影しづは 道信初信

心も何れぬ我方のゆきうろたはるやんきいぬいぬ  
近は更衣たがせり 延在河原

そはれもあけおすりこれ初露のたはれらるきいぬいぬ  
四色し 更む源周子

あさ露れなき川をえもたはれはきえうろたふ心いぬ  
影不知 園融院四奇

とれそつる露也いふる家あんいぬきいぬたはれすりあへる

強徳云

たひいそ侍さふさぬし 兼すうたさうろつる兼さの家  
清信云

うらむりか家とたりあるる物はよききさりある  
夏の軒女もまじにどかりてはけり小人と向すりある  
いそくしひてあひくはけさハハハハハ

藤原清正

千の軒の抄りすくおを交けいひく物う来曉りある  
女みこにりいそをめてあへぬようろつる

大納言清蔭

あさ露れなき川をえもたはれはきえうろたふ心いぬ



あつとてきいせの記はまう新の着とや志をふぶのこいん  
をふいのちりふもすう物さうとてうゆよきり人  
りやまといひ物たひらきうとつうとつうとつう

和泉式部

やまはまもあけ来もすしじうとて春のよ新あまといん

新不知

赤澤宗門

うらやうとていひむねに晴るも新とていひ来けいん  
悲いろわらうとありてあまふはうとてあま

九条入道右大臣

わいしんもあつとよかあまといけさてをいひとていん

小倉乃みやとあふはうとてあま

高子院少将

たきうに名あまのいあけさあまといひとてあま

影あま

藤原惟成

とけいもあまといひとてあまといひとてあま  
前裁の病とていひとてあまといひとてあま

あま

實方朝臣

に來て凡の神のいあてていひとてあまといひとてあま  
二條院のいあてていひとてあまといひとてあま

二條院讀女

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

歌三首

西行法師

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

後朝慈母の事

桓政大臣

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

女のおもいにいさかしてをりあまの治りあはれり

ていつとくさる

賀茂成助

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

女のおもいにいさかしてをりあまの治りあはれり

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

大久朝光

米えかぬら防れぬかぬらのつらむる恨てらう道達を病

三条宮白女河内守あたまつらうさる

花山院河内守

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

法性寺入道前宮白太政大臣家系合小

藤原道純

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

おぼしきまゝにぬくおあり毎にふり袖をもちつつか

藤原知家

後免すなりけり列女たりや昔人業成りて今をたす移り

西行法師

ありぬむしの出はまやふく雲はたよむらうとらうちの光

清原元暁

大井のむねのまはつらうとにまよふ年より書むあぬ

定よとらぬまの人のありふとてしめてのまはれ

ふし人とも次

夕暮にのりひらふを移るありやけりまやまをえらふ

西行法師人くよ百首よりまよせ約をばよ

定家約長

ありまぬつて夫風を移るりあしなれぬ約ありしき

無名よとて 大上天皇

そのあひ人をまられ山ありに移れぬ物といさふし月

ありまぬあく無名よとて合よふ無といふる心を

杉政太政大臣

かふゆとまじを里あつてに約そとものともあつて月

寄風恋 文内

きむいふうとれ免たり風をたすまらぬ巻はつあしあひ

歌不知 西行法師

かきそ風をうたを更ぬらにあらぬあひあつてあ



天曆は時きんはよあまむと約きれハ

女は孫子女王

あはれにうたへよあまむと約きれハ  
あして後らひいこえれ女王

坂上是則

音あつと始れ中のみよれあたまうらたふあを  
三隆院みころまをトローラれ久しくこせなほハ  
さらけしハ  
女はく神女

類一と次 中納言あお

景雲のしるしをひきつとよそをわらんあふとよそ

延喜はつち

あつちよあまむと約きれハ  
権中納言教忠

百首中よ 源重之

あつちよあまむと約きれハ  
あはれにうたへよあまむと約きれハ  
あして後らひいこえれ女王  
あはれにうたへよあまむと約きれハ  
あして後らひいこえれ女王

重之

守りては濱のつらきもかりふこそ神無道思ふがごとしゆめん  
貫之

かばいしふたをせられし夕をれは首けそぬむしゆらぬ  
あはれ人おけり女とかくらひゆらにせんといはれ男の  
つらたらていぬきうたをみてうらみきりとも女あつて  
守れいふもゆきり 平定文

とらふとたけしあもあはれゆきとれゆつら人日終と思ふ  
人よゆらうけり 鳥羽院行幸

侍りけりう積りうまきもあもに怒らうもそく海に  
行思のふと 入道前宮白太政大臣

秋をらほしと木とあふ人やあつといふふあつ行ひあはせよ  
持政大臣大臣百首奇合は契意のふと

前大臣信正慈念

そなたらあぬふくろつらりやがもていよははえうかあ  
女城うかていよ海にとてのらむ早ゆき  
あはれきれうらきり 丸衛門善家通

あはれはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
そのむらうそゆけり女とゆらうそゆけりあつてあつて  
由大臣あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

よき人不知



新古今和歌集卷第十

戀歌

中将のゆけりて女にゆけりて守り

清信云

よはよは若狭養をなむいづく人かはよそ縁とのをえり

也

よえ人あはれ

君のゆもなほいしてまを膏くともまのふたをうらみあす

少納言

よはよは

恋しきよめを命とよひてそよ人あはれはあしとよそ今

うらみあすゆりてゆくゆゆてあしとよそ今

二日くらりあつてつらき

後徳云

別てのまはよきゆとをえりてむらうとをえりてむらうと

也

恵子女王

贈皇太后

来りよもなほいしてまを膏くともまのふたをうらみあす

入道抄政いづくゆりてこしりまをいひんをえり

ゆきあゆむゆきあゆむゆきあゆむゆきあゆむ

右大臣道徳母

そよめあはれよきよめあはれよきよめあはれよきよめ

ゆきあゆむゆきあゆむゆきあゆむゆきあゆむ





四巻一

天曆沙奇

海心したのうらうらとみゆき  
女流のふくむけり母はうらうら

朱雀院沙奇

玉が二道ふゆふゆの祥も  
女流悲哉女王

行し庭のふえにあり物と  
藤原殿女流のうらうら

女流よ

後朱雀院沙奇

きぬ丸のうらうら  
女流藤原生子

四巻一

女流藤原生子

青柳のうらうら  
女流生子

四巻一

女流生子

阿そそらゆきを阿ぬ  
女流藤原生子

實方朔臣

ふしあふいし人のうらうら  
女流藤原生子

女流藤原生子

かきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ  
ひらきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

天曆源方

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

影あつ

伊勢

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

中務

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

躬恒

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

よみ人不知

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

人よつ

紫式部

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

あ

よみ人不知

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

影あつ

藤原純衡

あきよけのあついのこころあきまはあはれとてかきよけ

肥後

けしきしきすもぬ人よのまはくいふとそそめはれ月

海徳大寺九大臣

ふたりの月ふふおのむりそなひあつてもうらめちや

西行法師

月あまうとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ  
くまもあれはら—も今とあひ出くを月とやほつらね  
物さしてちうじうさつれ月の色よりほりたりあはれはん

八条院の念

ふたりの月ふふおのむりそなひあつてもうらめちや

百首うち中小

太上天皇

わきあふちとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ

おの番う合ふ

杉政太政大臣

わきあふちとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ  
つねを—して神やとれ月の色をくひくみえ福と

持中納言公卿

わきあふちとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ

左大臣待通光

わきあふちとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ

右大臣待通具

わきあふちとれえちかかふんあてなひもそは公がよむ



二條院讃歌

秋をよみてあきなりうす志よりのにぎり毎夜や一巻は庭の白露  
抄政大臣家百首より九の巻より

宗蓮法師

こぬかと思ふもさうな庭はたものよもりの来てまはよ海は  
新古今

丸忠の権通光

その秋も神ふくもさうな庭はたものよもりの来てまはよ海は  
藤原保季の臣

藤原保季の臣

かゝるそがのあり方一秋のうらむじりて庭の藤は  
法橋行遍

法橋行遍

若抄は庭のあきなりうす志よりのにぎり毎夜や一巻は庭の白露

抄政大臣家百首より

定家朝臣

長き秋の神もさうな庭はたものよもりの来てまはよ海は

家隆朝臣

風をよみてあきなりうす志よりのにぎり毎夜や一巻は庭の白露

百首秋より

抄政大臣

いとほりさ今もひまはえの雲月日暮とて物存ふは

子百首の合

家隆朝臣

なほそよたかひのしる末のんまはの雲月日暮とて物存ふは

二條院河時類書に云くも

形は乾葉

早れゆく人指し見とありしはたしくぬれをせむ

新古今

殷富門院太博

わは後月にはさむじ地とてさしよをれをぬるをさり

西行法師

うきをかり人ともふとてうきをたてぬれをあり

今も心なほし出ると誓いしはたきんそのさけり

建仁元年三月の合は遇不遇を

大御門内大臣

あひやうさ着かたりれうきをたてぬれをあり

権中納言公持

家なりをりやまのゆりともたてぬれをあり

右清門舊通具

誓まゆぬれは露とてうきをたてぬれをあり

兼連法師

恨いしうきをたてぬれをあり

寛秋門院冊後

忘るるは葉ふ成るるをたてぬれをあり

歌乃百首の合は





水亭漸乃恋十又首方合

太上天皇

山はあまぬむらり文はとのつらゆりしを首より

五家物語

物をもしてたふくみ霧よにぬる道いおる林のほを

雅經

兼統じしきくちむわくさく決めるとぬれおのるかむら

和方町并合は深山恋とふくみ

家隆朝臣

こてもれぬれぬれの中ふと山雲く風は旅よみれん

藤原秀能

竹の音なきをきそらまてやなれもあはれ山移る如

歌不知

鴨長門

なる秋そもを哀とむらとくは免さるる林のゆふを

子音番方合ふ

右衛門督通具

あまの紫れうつらゆれもさぬきいりる身時毎とふらあはる

定家朝臣

きえしぬうのりふの林を小身とあはりの松風

杉政太政大臣家方合

家蓮法師

いぬと秋のそよまきあけぬんうみよとてお松虫れい

恋言とよふゆかり 前大僧正慈園

我恋え危れしう疾う病て人とて身をも枯の夕暮

彼恋えのむと 太上天皇

袖の露も何れぬをいそきうつらまはかた御歌をうたに

定家朝臣

ひせよともさしりぬ心かろく屋よそれのこころぬとれ歌を

家隆朝臣

とら積りぬがし袖あかふるもたけ夕暮とてそのむね風

皇太后宮大夫俊成女

霧も袖にぬれぬ秋のむしり中かんとてぬ暮ふのさゆあしけ

杉政大臣家百首言合よ恋恋のそらむと

前大僧正慈翁

心よゆき清をとら秋のゆかり山秋のこすもれ夕暮乃見

百首言中小 式子内親王

あけのやまより月日れらり月日れむれらよとて

いそてしもの事とまて人泣く舞のこの夕暮とてほら

晚恋のむを お大僧正慈翁

あけの月夜やえにそらふん神よわらけ御鏡乃とて

千五百番言合よ 権中納言公經

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはくはく

定家別後

その身をたてまつる海よまはるひのこゝろよまはる  
あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

雅經

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

皇太后文太皇太后

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

新古今和歌集<sup>卷</sup>第十五

恋哥八

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

藤原定家別後

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

右京家隆別後

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

前大僧正慈圓

あはれなる心ありて海を渡るもくはくはく

歌不知

右近中将公衡

恋しむ所方病とまゝぬもそわらふ事業と氣とんじ

右末の増通具

そくあはれがふたひの事と日向の病といふ

家小恋十首言ふ丸のやうな

持中の伝後忠

物に毛き山と物と寄物といふ物といふ

類一の次

道信の伝

つとまりとたひひしも毛き山と物といふ

藤原元真

に病といふ我方を病と来しあひまきとて

平のあそびをう女のらに也事とふせとゆわ

なこにいつて

和泉式

海にむとふとく病と来しあひまきとて

たのち平のあそびとあひまきとて

さしてゆかりとよ

藤原長結

あそびとふとく病と来しあひまきとて

藤原惟成

よと人

らとてをを病と来しあひまきとて

や

藤原惟成

病ありて病のさうたをうらつひよそしるかたう公お病  
類不知

花山院四哥

病をすく来えりつらつた身か病の病よじのまら

ひさしくさしぬ人よ 光孝天皇御方

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

重之

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

六条右大臣宅

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

後述云

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと

光孝天皇御方

病のまらうと病のまらうと病のまらうと病のまらうと



夏野中くさくさのけしきつはるやうも是道とてなげふもく  
をいふは病のけしきもあはれとてつれづれとく時をい

八代女王

みそはるのなまはとほろりせよ、おれれつて下ふたし

清原保春文

恨つぬる事の神志かたぬ海くくのまにさやうん

中絶云家持よけしき

山口女王

あつてもさらさら塩のやうにあつてもつてさうのけしき

あつてもさらさら塩のやうにあつてもつてさうのけしき

題云

赤澤未の

伊ふ神てまうさうんうた神のあつてもつてさうのけしき

糸議筆

らうさくし神物の中あつてもつてさうのけしき

伊勢

ま乃あつてもつてさうのけしき

威明親王

春れよのあつてもつてさうのけしき

女御徹子女王

あつてもつてさうのけしき

昔乃教女乃をこしにさかりて所ははきけり

徳宣朝臣

かほそり給てあつる言はふふまふつる言あつる

歌一十次

宗蓮法師

源川男をうねぬを秘えられくうりて夏は名抄をう

百首言す小

家隆朝臣

あふとみくおと我とあふくゆねとくあはれ乃とく

歌一十寸

基俊

心化く物あかき舞のまらく次着るとくををたれ

千五百番言合よ

皇太后言大史俊成

あそ積たりうた袖のまはるはあはれむじまのま

歌一十次

定家朝臣

あそ積たりうた袖のまはるはあはれむじまのま

和歌和言合よ遇不逢恋乃心哉

皇太后言大史俊成

あそ積たりうた袖のまはるはあはれむじまのま

恋言とて

式子内親王

あそ積たりうた袖のまはるはあはれむじまのま

并

あそ積たりうた袖のまはるはあはれむじまのま



宗徳院一百首言をてとほりきり時癒る

皇太后文大文俊成

思ひしやけりけりえとほりきり時癒る

顔不知

お模

なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを  
ねとこれへくともすまらけりてやとすのれ

おきり

馬肉の

ほりかはるきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
しりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを

なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを

年よりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

ほりかはる

藤原仲文

花とぬらふれ拙りあぬ神の剛いあれを

久くきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを

忠盛初辰が礼くよちりておちりてはるきりきりきりきり

なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを

事小

前中池云お盛母

なす種をんうさあにさうとむけりあぬ神の剛いあれを

歌の次

皇初門院尾張

歌うをばはく人せはるるういせありあはじりいりたり

和泉式部

いあて侍にいあせはりくふとくも物成に毛いさる人未

深養父

う祈るわはらういもありあういもいもいもいもいもいも

系性法師

あまのりかみいもいもいもいもいもいもいもいもいも

小野小町

我力いあはぬいあはたうれいもいもいもいもいもいも

徳宣朝臣

かきいあはらういあはらういあはらういあはらういあはらう

倉主輔親

いあはらういあはらういあはらういあはらういあはらう

伊勢

なにいあはらういあはらういあはらういあはらういあはらう

業平朝臣

いあはらういあはらういあはらういあはらういあはらう

梅花の神よあはらういあはらういあはらういあはらういあはらう

和文女流より書り 天曆河原

天原也... 女河

四也

女河微子女王

歌人... 光孝天皇

歌... 次

光孝天皇

あま... 女

女... 親

平親

な... 躬恒

躬恒

躬恒

雲... 并東

并東... 延

延... 延

や... 延

延... 延

天曆

春... 西

西

西

あ... 春

春... 春

春

あ... 春

影あふ次

藤原元真

任言此意可也道中尋之終之ておれふふあつち我をうま  
妹文女流にりり約をりよいつちりあつちりきむ

天曆清言

あはれよるがたかともなむわらむとあつちをいれに  
久しく成よきり人あつち

謙徳云

おられたのつこぬ思の縁ゆふふういれをわてわらむ

影不知

持中納言敦忠

公ももゆをさうりけり余もそそのりいさういさあぬ

藤原元真

せりうれも人のけいもも忘れ方にいぬいふいぬい僕も

忘のしてかろいあつち女もわきまていさあゆきれ

糸織管

かき形ふあつちやち中にいさあつちいさあつち

影あふ次

藤原惟成

人あはあつちいさあつちいさあつちいさあつち

いさあつち

我よいさあつちいさあつちいさあつちいさあつち  
今もいさあつちいさあつちいさあつちいさあつち



一条元正大臣

長明の昔れ人となふおのまのふらけおみゆみせまうや

心な事

園融院河原

いとがきておののうたふとて音成るおのたふり来

月あけくゆるりよ袖のあきとらるる

大信正行書

春ふれ袖の少をさけよきりるる月の原らるるふ

寫と

菅野太政大臣

言ぬとまきけりりのよそけいし男にけりるるふいふ

梅

あつるふらふらとておの梅も言ふれやとておのふ

枇杷元大臣は大臣よりてゆるりふらふらとて梅

をわりて

貞信云

と我くさるるはのよきれぬる梅花をうとておの梅

延長のころはけい又位元正のゆるりるるをさるるゆりて来

在院の時<sup>ヤサ</sup>元正八年又おのりたりておの梅年正月

ふらあそいゆけり日梅花とわりくふらゆるり

源云忠行書

百あふらとておの梅とておの梅花とておの梅花とて

梅とて見ゆりて

元山院河原

冬を以て行ひては道は梅花の影のぬふふを我々て是方  
と東門院を以てはじき行ひきり春を以ては梅とて是方

大貳三位

梅の影のぬふふを我々て是方

東三条院女御よむらもあらはれ四駈院はひり

わたり新きうはきくゆりてゆきいのかめりりしつ

くき

東三条入道前右大臣

善隆寺を以ては行ひぬふふを我々て是方

四

善隆院

ひりては行ひては春を以ては梅とて是方

柳

菅贈左大臣

ちりては行ひては春を以ては梅とて是方

新

深養父

音乃くきはひりては春を以ては梅とて是方

堀の院よむらもあらはれ四駈院はひり

梅とては行ひては春を以ては梅とて是方

園融院

か来りぬふふを我々て是方

四

大入将朝光

けりぬふふを我々て是方

高陽院をむすびつらふみくよ尺のきり

肥後

義代とちふいあつ富のたやみ控さそ尺そ花をおきり

やー

二条宮白河大臣

枝こむのすまそ白の花あまのちりもみ中そとみちりあ  
と清つさあそやういさるりてれらう句ま  
とつこも大田乃花尺母田もりきゆよまらり

藤原定家約後

春とくみ中來ふたりむむのちり約もそそ春やふ  
寂膳寺れはらふまらりううむそそくありあそ

花のまぶうちりて風ゆきうまらううまのり  
とれこもふあせくそそあはられはらう作ら  
そりそれゆいさかりて尺約きれあまそれ年く  
言めそまそそそらあれよまゆしそそなはいそ  
よ尺のきり

藤原雅經朝臣

あれそそそ若抄の言也そそあそそはら花の下に  
建久六年東大寺倍養小初幸れこれ興福寺  
の八重桜そらちりそきり尺尺そ枝よじといつて  
約きり

後人しつ次

花とむいあそそ花櫻のちりあそよあそそそら





之風散花といふはよきなり

大納言忠教

横むとれゆくまらなそや風もとくもぬらふも地もらん  
色相敬めて花のちりかこころ紙からしめてはら藤  
由大臣おぼせなり 鳥羽院河原

行りとも常のぬせは花も道はよき心風もあいにいん  
世紙のよきて後百首より人ゆき方に花もよき

皇太后文太史俊成

海と道とよき山花とよき花もよき  
入道お国白太政大臣おの合り

春とれよ花ををれよ花ををれよ花ををれよ

花のちりかこころ紙からしめてはら藤

て花月を雲れ花よそ花よそ花よそ花よそ

善いなり大納言のり人よきなり

前大僧正慈園

まきやまののちとれよ花ををれよ花ををれよ

題しつ次

采の戸よあかしく花ををれよ花ををれよ

西行法師

世中よ花ををれよ花ををれよ花ををれよ

東山は花見は海よりゆきて二道は花見は海よりゆきて  
さしあがきとありてさしあがきとありてさしあがきとありて

女法之所

身はさしの心をさし海山操風はたれに思ひたせよ

題云次

後頼朝後

あつたはれは海山操風はたれに思ひたせよ

橋為仲朝臣よりあつたはれは海山操風はたれに思ひたせよ

さしあがき

加賀左衛門

白浪のこゆるさしあがきは海山操風はたれに思ひたせよ

木下は海山操風はたれに思ひたせよ

題云次

法原幸清

春は海山操風はたれに思ひたせよ

百首歌より時

前お納言忠良

春は海山操風はたれに思ひたせよ

あつたはれ

あつたはれ

春は海山操風はたれに思ひたせよ

宗徳院之林下春雨といふは海山操風はたれに思ひたせよ

八幡院前之政大臣

春は海山操風はたれに思ひたせよ

宗徳院之林下春雨といふは海山操風はたれに思ひたせよ

物類し約なりこころゆめしあきあむむと屏風のうら  
まけし新しゆまね 實方御后

あつらふもかたむしよきよとくのかみふゆりみりし

四巻一 園融院四行

うき中つていそゆくは味のいよぬきよはちり人のあ

お十首あまのし 前大僧正慈園

とあつちかよにけすお察えお覚あつあゆきたれぬあ

せとの積てれら四月一日と東の院太皇太后を

トそりられ衣之乃以紫束子てとけつと

は成寺入道前将良太政大臣

かゝ糸むらたけいふぬとくを我れ喜れをいそらけはま

四巻一 上東門院

うらむそらがむあつる春のいふそつ花の色とみり合

四月系乃目まをむらりのそりてゆきろやうとれれ

と彼おぬらりあつたはよふ系ようきつひゆきろ

世志式部

糸代母はありをやとらん機をさよあかういふむろあうしを

と糸のむしうなむいそ

式子御親王

やうあははの糸はれそし花あつるのえとわはれぬ



とよき道はまはれわたるのちをいかにまはるべきか  
神水  
形不知  
花山院御寄

むらむら宿のこころをいかに  
贈皇太后よきにして春宮よきにして  
義孝いふをいふとけり  
恵子女

よきついでに  
月あつたをいふ  
和歌式部

むらむら宿のこころをいかに  
七條院大納言

こころをいかに  
中務

神のこころをいかに  
葉平の宿のちをいかに

紀有常朝臣  
むらむら宿のこころをいかに

中未のいふ方よりあそく七月十日の月日と  
いそくをりたれハ 慧成神

とらわしてやされもつねにそされか  
みこあまといけられか納言藤原経朝の  
いそくまうりきりともいそくじきぬ  
そらりそらりくまをいそくして

三條院の哥

月影の山の上のくかたれあそびくう  
影せとよむか

歌不知

藤原為時

巻一

山の上のくかたれあそびくう影せとよむか

参議正光に河内月影よまほして  
りそらりきり

伊勢古物

うれ雲のたけのくせともいそくそらりて  
えゆ月影もす

歌一

参議正光

海雲にたれともいそくそらりて  
えゆ月影もす  
三井寺小浦りていそくそらりて  
えゆ月影もす  
母人くあそりたれともいそくそらりて  
えゆ月影もす

形月の範意

月影の山の上のくかたれあそびくう  
影せとよむか

山にふらふりかてゆると女さして侍るは

法原静賢

思はれ人をあはれ此の山にむらりたるもあはれ月

八月十八日秋の夕暮とあはれこゝもあはれ月

ゆふ 氏神の籠光

わらわの意の風をなすけしとも浪の色は月まかり

和方町奇合の湖と月明と月まかり

暁秋門院丹後

秋をすく浦のく船の波の月をたもつるが波のうら

顔不知 藤原盛方朝臣

山の上のむらさき海にせ中かそそくそとけりぬの月

永治元年の鎌倉にけりて秋をすく月とみえ

ふらんゆかり 皇太后宮大夫俊成

あはれむらさき海にけりて雲のけりぬのうらありせ

崇徳院の百首をそそゆかりけりふ

侍多しと袖ふひりりあやうらんを舟の月をそそく

文治のころ百首をそそゆかりに懐向をそそく

左近中将公衡

公はわらわをそそけりそそりみよのじく此雲のうら月

百首をそそくはけりし小秋奇 とい



二降院讚文

昔々雲の底より海嶺の月は輝くを袖に穿てて  
月前迷懐といふるをよきとす

藤原純通御長

うねをせしめし一程の月をたけふらきるを月  
石山よまうて作りて月を見てよきとす

藤原長継

秋の月をまじりて山の嶺よきとす好く秋の月

秋の月

躬恒

阿の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月

月乃阿の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月  
月乃阿の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月

源道深

いさく秋の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月  
秋の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月

あて

増基法師

天原の秋の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月  
秋の月をまじりて秋の月をたけふらきるを月

いさく

よき人

たろちの一人もつら此山風も秋の月をい

百首をきりし時 杉政大政大臣

月みそとひらゆる此人のそよ木もたけくを乃松風

六十首をきりし時 小山家月の心を

前大信正慈園

山雲小月みよし人の心とてゆく風を木もたをそよ

杉政大政大臣大御上仰りて此月を六十首をきりし

なりし

色ぬる月みゆきとあつてを那も此鐘をきりしなり

杉政大政大臣小山月をきりしなり

藤原業清

山をみよとて招の本はくをいへるありぬる月

秋夜而奇合小源山曉月といふなり

鴨長明

書をすしひらみ山を招きよ小を説きしありぬる月

熊野のまじりてゆきとてをきりしなり

藤原秀経

行く山の木はくあつた秋をせきとて山の雲を招き

月をいへるありぬるにまじりて山をいへる風

山家の心をいへるなり

前房法師

千鳥あそびぬ葉のあまたはゆきこいぬとらふ物月  
影不効 花山院行房

暁の月をむらうもたぬとねとみし中あつち事法  
伴規太物

五の月よりりたがふいまれあふの屋は庭に  
和泉寺

何れの人をいふも我をよこさぬ月はくよも  
あやしく月照水といふり多とく懐ゆるふ

大絶云絶信

何人もあつたればがの常のりし月つるあまを

秋の音小あつたのそよ風の道ゆきさるり又秋年の  
雄九月十余日月海がくゆけりふよるあつたり

皇太后宮大女俊成

思来やの秋は秋よあつたりあつたをいふをいふ  
影不効 西行法師

月をみくさう秋つあつたもあつたあつたりあつた  
秋すく月をいふをいふをいふをいふをいふをいふを  
月をみくさう秋つあつたもあつたあつたりあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

よのちやうの我身はいと思ふにほふふ月めはうき

入道親王定性

なやうしてさかぬ思ふふ糸よりたふ月かろりぬ

藤原道純

けり秋の月よむをたうと先てうれせに幸ははるめりぬ

幸首あうくに お大信正慈愛

秋をへ月とあむる方とあはりいりのやんばふ新らん

百首歌より一紙 存原隆信の臣

あふそとむらけはさふらたふ新らんあふの月

新らん守 源光新

あふのちと秋の月秋人いふふとうと春のあふり

千五百番三合よ 二條院續波

あふらふ月やあふぬとあむしむとあむら新らん

せをそとむらぬにむいころけのあふ月とあむ新らん

寐題は師

あふの月やあふりこれとははらりあふら新らん

山所あふく月の秋新らんあふらとあむら新らん

大江嘉言

あやの秋あふらう前ふむらう月よとあむら新らん

あふの月やあふらぬとあむしむとあむら新らん

きりぎりす

堆明親王

思ふ事もあはれなるよとあはれ事もたはれぬありぬる月

きり

式子内親王

あはれれりやうりあはれをさす都のりをもあはれれり

春日社宮合小腰月の日を

栲政左政大臣

天乃戸城よりいづこの雲よりる銀代の月れ新そののけ

右大臣忠純

雲とのまじり糸物とてありすよ月をこすよとらこの

藤原保季親臣

入るて雲とけい月れやとていぬのくあつるよとら

月れつとて雲とけい月れやとていぬのくあつるよとら

けあつるよとらいぬのくあつるよとら

とらいぬのくあつるよとら

あつるよとらいぬのくあつるよとら

ゆてかあつるよとらいぬのくあつるよとら

法橋新遍

あつるよとらいぬのくあつるよとら

古の月也

宗鑑法師

あつるよとらいぬのくあつるよとら

遍照寺中月をみく

平忠盛朝臣

すいれきむ昔の人のけさして宿ありぬありぬ月  
あひたりてゆき人のをよこしとらふそらけり  
世の人あふふたれていぬあきくろ宿ふ月う又  
てゆきれは

前中納言通房

ふく深きけきろ有る人のあしゆらに月の影をすけり  
影不知

祢紙伯顯仲

かきあつらふらえは浦志にきりきりきりきりきりきり  
後惠法師

難波のこたけのあきかたしとる月をふけ給はるる  
和らあつらふ合ふ海を月とよそと紙

前大僧正慈圓

いふは海は月の中かの守まじいよ海は海は海は海は

定家朝臣

きりかむむ神の月影とつらきとる海は海は海は海は  
存承秀乃能

ゆきとく色あけ人の袖とみよすは月を照らす物うは  
徳野ふまうてゆきは井てに切目宿光海を眺  
望といふるををよのこもほくまうらうよ

興親

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

皇太后宮女文俊成

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

千五百番寄合

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

野守

西行法師

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

きつ

守實法親王

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

寄風懐問といふ

たかしの普通光

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

皇太后宮女文俊成

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

新不知

御雑成仲

あつらひしを毛をそよあつらひし月まの波のあふれは舟舟  
今ふねはくつらりてはら百首あふりしに續て  
まひりし

法成寺入道前執政大臣高直

一とくくゆけは六 装束部

とてふくゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
は感入道前格後大臣

とてふくゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
影さく次 曾祢奴忠

山宮に葛といふ所相取のいけのゆけは六とてふくゆけは六  
秋のこれゆけは六とてふくゆけは六

百とてふくゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
頼總のゆけは六とてふくゆけは六

とてふく 前中細言匣房

秋のこれゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
九月はゆけは六とてふくゆけは六

花すこれゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
心宮にゆけは六とてふくゆけは六

細言の長うとてふくゆけは六とてふくゆけは六  
後述ある方大臣

秋のこれゆけは六とてふくゆけは六とてふくゆけは六  
前中細言の長

とてふく 前中細言の長





後白河院の事

霧乃命をさすまうしはわくしうらめしうきとありまは  
男にせして迷懐の事とあり

皇太后文太文俊成

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし  
佛者の事とあり

朱雀院の事

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし  
朱雀院の事とあり

前大納言の事

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし

河形宣旨

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし

皇太后文太文俊成

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし

慈覚大師

世に本すまよりの男をさすまうしはわくしうらめし

新古今和歌集卷第十七

雜奇中

朱鳥五年九月紀伊國より新羅時

河島皇子

あふ波のよみおとえれをむけまつくよまておのほけをぬん

歌不知

式子の宝鏡

山し移りいづ因れとのには我東見はけやる山移りゆん

在原業平朝臣

蕙の露を分くみよわさむいぬあまのしあはれとくもはれとまに

と向新の星う河をされ雲かを我すむかこの河はれとくま

鏡人あふ次

とられあふとあ塩や<sup>煙</sup>燻風とささるはのりてはよまたあひ

貫之

たふとあれをほいとをかりとくはをけあろ燻そをぬはえあれ

あふあふとあ塩やとゆきあ

忠岑

年望は移れぬとれ橋よりらひくあふれ若ふからて

惠慶法師

春れはのたふれぬとれ海は私とあてとまを橋とさるとさるぬ

後徳大寺大僧

朽小なるもの此れも来ては其の積る物も吹

折るる次 権中細言定頼

にまの巻物にさし難波の境へ付てなすも其れも吹

去次たのこふりわりてよるは

藤原孝善 孝善

浪の浦に吹く風もあつたあつたあつたあ

天曆以時屏風等 云生忠見

船風の突くこゝろをさし上り船をりやうと海に浦浪

卒首等より入てきくくくくくくくくく

前入信正慈園

是海に吹く風もあつたあつたあつたあ

和言可弁合小周路秋風といふは

攝政大臣大臣

人ともいふ不披の雲を板ひくくくくくくく

ゆふ浦ともいふ 後頼朝長

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

毗堅のつとともいふ 兼運法師

初言の浦とわら葉のうにありは道米す浦よりくくく

さる番ともいふ 正三位季能 初言

足りのえれくくの葉を吹くはよといふくくくくく

海邊のやど

藤原秀房

海邊のやどにそとをくまひのしほのたぐひのたぐひ  
むとめはけしきよきうしてそらゆて大はらうにむら  
志のそと

女河内子

大はらう浦より海へそとむかひのたぐひのたぐひ  
大貳三位ゆきよきうしてそらゆて

後冷泉院

まはらう浦より海へそとむかひのたぐひのたぐひ

以て

大貳三位

佐伯のむらよりそとむかひのたぐひのたぐひ

教皇のむらよりそとむかひのたぐひのたぐひ

御新成仲

うらやまのむらよりそとむかひのたぐひのたぐひ

百首よりそとむかひのたぐひのたぐひ

越前

大はらう浦より海へそとむかひのたぐひのたぐひ  
海色霞のむらよりそとむかひのたぐひのたぐひ

家隆朝臣

大はらう浦より海へそとむかひのたぐひのたぐひ  
大はらう浦より海へそとむかひのたぐひのたぐひ

皇太后宮女文後成

空ふとや、我れつひん伊勢崎やしらけうのあはれと  
伊勢よ海らき海とれよあり

西行法師

すかしく我れをよ我れふよりとそいふあり新日るあはれ  
冠不知 前大信正慈念

世中をいさうくもいぬる市らりり身れあはれ  
あはれはれとけの志約ありふりり山をよあり

西行法師

風ふあしく風去る極れを消くゆをえとぬる思ひね  
と月れはにこそりい市の上雲ありとぬる思ひ  
ふくありぬるあり 業平和臣

けらぬは道ありの心とそあはれにゆらに若れありん  
冠不知 在原元方

春地もとらぬれとの春に雲とひんをたはれかたぬ  
平首よりありあり 前大信正慈念

花ありそそ葉のたをりて思ふをたはれもみりけれ山  
冠一ら寸 西行法師

あはれとやえ叶とにけりありとれありありと人ありありと  
藤原家衡和臣

いふはもこれ作とらう此をさるる事ありし時のはれ此秋の夕言

又百番う合よ 右巻の普通具ツギ

むすしりよまも道あはれも秋の夜よあけかき風あはれ

守賞は親と事十首うよませゆきりに閑居の心を

よ光る 右巻の巻

それらとて後をもまらよまもとらまて中風うらや

名物あはれう合ゆりよ小家風といふこや

圓秋門院丹後

山雲はむらじらも色とくぬきとのりかろあはれ

百首歌きりよふ 右巻の巻

勢乃とく松の風もこれあはれうらあはれこの巻をうら

歌しりす 左巻の巻

あはれけしきあはれの巻に海に事あはれ風をこしてけ

か将高光横川よ海らりてからたらうゆまきりに

張つて海をて 持入の巻

わらあはれあはれうらうらあはれあはれあはれあはれ

如賞

白露を新に夕あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

結宣の巻と系野よ海うてゆきりにあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いづれをわたりしるす冬をたぐひしゆきれは

よこ人あつと

世中とてむじにほそくわをたぐひしゆきはよこ人あつと

徳宣約長

男よはつとふのふしきつてふふはあてふふいりせん

あはれはよふ人のけりけりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた

あつとふふいりしゆきとてふふのけりかた



あつてはる代よまの心あつてさうさうにさうさう  
山家おとよこみ 皇太子宮大文後成  
いとよとほよまの心あつてさうさうにさうさう  
春日宮合よ招風といふるこも

百家の名

我がはる代よまの心あつてさうさうにさうさう  
山寺に約りあり 道余はゆ  
をばさひくさうさうにさうさうにさうさう  
少将井の尾大原をいへてさうさうにさうさう  
和泉式部

世はさひくさうさうにさうさうにさうさう

少将井の尾

思ふにさうさうにさうさうにさうさう  
頻不知 西の法師  
誰かたてはるれさうさうにさうさうにさうさう  
あつてはるれさうさうにさうさうにさうさう

殷田門院名補

かすはるれさうさうにさうさうにさうさう  
は輪さうさうにさうさうにさうさう  
道余はゆ





美濃屋といひて毛又作らん霧の余志わづらひ  
朝をいそぐもくさくは修の志のきりいし  
こと次約されは海よりしはくつてきり

大僧正新尊

わらわにやうは人のさかんとあはれむし  
あはれむし人の徳をよきる約きりにし

々々 女法と神

世にひく山のなれ松せよきりやわづらひ  
西行は神百首よりしりてよませゆきりよ

家隆の后

川の里昔みたり小病と起てるぬら  
百首歌をそよけり中山歌なりを

式子内親王

伊豆にれ松なりし所の松乃屋小の言ひを昔ゆ  
小侍伝

行政大臣

志たつじし所の霧の中道にいそり  
馬乃人ふとぬ山り松揚を電にありか  
百首歌よりし時 雅純

親厚の霧のそいけぬそそきに  
新屋の霧のそいけぬそそきに

後進は神弓海らりてわりのやうなるはくもた  
木をこもりしもやむくもやむくも

賀茂重保

輝きとて燦々たる炭竈の煙をけしきとそわたりん  
む後にはふふりて空にまわりあそぶるに楽連  
そり孫ゆりて約筆よりなりは海鏡あけて毎  
そ約筆に  
西日は神

今海よりあつむくを約筆にて了んはくもた  
は家よりあつむくを約筆にて了んはくもた

前大僧正慈翁

山雲にまいる人のこころはこれわぬやうに  
後白の院よりあつむくを約筆にて了んはくもた

式子内親王

をみえのらり青い雲をきれとわたりしをみえの  
迷懐百首よりあつむくを約筆にて了んはくもた

皇太后の御大支俊成

ふふきむきりそわたりて此竹の葉よりあつむくを約筆にて了んはくもた  
むのらりむくを約筆にて了んはくもた

祝部成仲

ゆくれ昔はのそわたりて草茶すゑの香よ袖わたりて

影不知

お大僧正慈園

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

西行法師

あつた煙をききしきりてにわが煙はなふとすなはれしきりてにわが煙

山のふもとに思ひてをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

あつた煙をききしきりてにわが煙はなふとすなはれしきりてにわが煙

昔々をりし秋の年ゆりてはらりしきりてにわが煙はなふとすなはれしきり

三井寺をりてはらりしきりてにわが煙はなふとすなはれしきりてにわが煙

大僧正慈園

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

百首云積徳のきりてに  
権政大臣大臣

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

西行法師

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

貫之

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

能因法師

思ひの里のあけをさするあまのこをさするあまのこをさするあまのこ

一 我のつえりあし人との望みおぼしき有ふすれ揚ぎ  
あしをたをた 西交はし

仔細を思慮りてを悉わらる望みたる宛れ若のいんげ  
守賞は親王守首言よませゆきり困辰の宛を

定部約臣

わらふにこと終一人を首あきこれら危れ治んそあは  
物下りりきりあらぬ人あきくあぬりきりどかて

赤澤忠心

あし本にふりこりあしとせうう世中いあふりは  
類とくあ 人 磨

秋意にあら人の中をうらたたりてもあそも物とらたふ  
天智天皇の事

あそもあ本のまらしれあつと進ぬあたりとらつて  
あそもあ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

新古今和歌集卷第十八

雜歌下

山

菅贈太政大臣

あしづかぬ山にふかき道はまを越えてはゆる人ぞた

日

と東のひかりの光ふたを道のたのしみえのころ来

月

は清くはにやう月と思ふもは鏡のたのしみえのころ

雲

山をたぬひのやまをたぬるのころはたのしみえのまじ

霧

香たつては白くはなはたはなをたぬるのころはたのしみ

雪

花をたぬるまはたつとあはれはたのしみえのころはたのしみ

松

花をたぬるまはたつとあはれはたのしみえのころはたのしみ

野

はくちをたぬるまはたつとあはれはたのしみえのころはたのしみ

道

はくちをたぬるまはたつとあはれはたのしみえのころはたのしみ



海

うたの次平らつる水のそまをまふはらの月をてんじ

静

むらりの中をひよもつがさぬのこつら橋よはれん

波

おの積木とまらぬ波をゆきゆきとまらぬわらわら

形不知

よこ人しつ

し浪のいられ風うたふけはけりすのちとれ袖つる

ちり波のうたふたふたはけりあまのこわら音をゆき

おの積木とまらぬ

おの積木とまらぬ

舟の浪のそまをよけりあふれつるそまをよ

類しつ

おの積木とまらぬ

おの積木とまらぬ波をゆきゆきとまらぬわらわら

おの積木とまらぬ

おの積木とまらぬ波をゆきゆきとまらぬわらわら

おの積木とまらぬ

おの積木とまらぬ波をゆきゆきとまらぬわらわら

おの積木とまらぬ

おの積木とまらぬ波をゆきゆきとまらぬわらわら

おの積木とまらぬ

順

光もきりぬたの木のうきなりとあつたけとよきにおひか  
らみをもむとしてよるのきり

能因法師

是引のよき水ゆるしき道半程を流るよむ道光よき  
あふにありぬきまうけう人ぬきぬくけいりて

法成寺又道安移政大臣

あふくむりきと流るるよき道安とせりえうけいり  
后ふきりなきしきりて冷泉院のききとれまら  
以てふいとそとまうけいりきりぬ出家志とれ

至るよとまうけたまゆと

東三條院

世のふれむりかうとらうよきはあつたよとまむ

冷泉院太皇太后宮

光もきぬひりあまのきよきぬてはしきあつたか  
上東門院が家のつらうよき紫衣とらう沈るす  
とらう孫のよきしきとれまうけいりあつた

枇杷皇太后宮

かまゆん家の色紙むいりあつたやうとれまうけいり

上東門院

せー

由らむにそのむよそわつてかきまゝに女ぬらりてとれ  
歌よきる

和泉式部  
とがらまふもれうりかきつむしとて我身のみほ  
屏風乃志よとがらがの浦にたてのりきり

一條院皇女宮

いみなりあまや煙ぬれん人女をそよぬらかきり乃浦

小將高光横河よつかりてかきぬらりゆよそと

未を揺りくけりけり

天曆清奇

都より雲乃やそつらむらりよほ乃あはれ人よりん

四巻一  
ゆき

百あ乃らむれはしほひよそとて雲はるる山にすえり

をばしよそと小將といぬらよすえのり此業平権

乃雲のいしたうりつらりそとれはけてまうて

きたるあはれはむらりいそとより人のきりよ

増喜親王

あかたをちふつたもむしうそとてしほりきむれと

都のりにはれぬきりそとろりしとてまうてけり

人あはれりそとろり 女御徹子女王

雲乃とそとろりしとれはむらりよほ乃あはれ人

享子院の事と云はれしに

作册

あつたを以てかかれ百歳ありしを好むるを  
殿とて建しゆりて久しむる

藤原清正

あまの風あけの浦ありそこのまじりて  
二條院言はれしに由てつらふ言ひし  
思ひこゝ大細言の信よりくゆるる  
あまの浦の事と云ふも  
後人あつた  
あまの浦の事と云ふも

寂庵天皇院の隆子にむかひてかきしる

定教の旨

あまの浦の事と云ふも  
寂庵は仰千載集かきてきてつらふ言ひし  
あまの浦の事と云ふも  
あまの浦の事と云ふも

後白河院の事

あまの浦の事と云ふも  
上東門院高陽院の事  
あまの浦の事と云ふも

後朱雀院四哥

籠せよ人の心を方とては首をいともかたうるをくら  
於中細言通後拾遺をいゆきりあらまひか  
るもゆりかたしとてゆきれやゆきせていれと  
ゆき来よう紙をせぬやとゆきつてゆきろとみえ  
ゆきとゆきと  
周防内侍  
あさかぬをそみゆきとゆきをたすきゆきぬきゆきぬ  
奇ききまきとゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
あはめてそきとゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

公見忠見

さの葉中とあましくさの葉中むのふあひははら  
遊女ららわとよえゆき

藤原為忠朝臣

いしゆのまゆいをもぬゆきもたのふはあまう  
大に報子辨子ゆきめて殿とゆきゆきゆきゆきゆき  
てあまゆきとゆき

若深中

葉のまきたらぬ神のまゆきとゆきゆきゆきゆき  
秋のまゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
まゆきゆきゆきゆき

伴野大輔

うねりよはなほやうしうとねまきあつるをのちとねりたて

也一

大納言純信

秋風のよとせとらまは白雲此水の志はみかからるる

あつやうあかしくいゆるは朝光大納言のほとせ  
いとよおころりしとがぬりく又の日

大將 源時

あつ草、うねり霧をたつて空内と福をさるるあつる

也一

大將 朝光

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

小馬 余田

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

也一

和泉 武久

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

也一

大信 正行

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

あつらよとそつねさるせとせまよしとまきしあつる

カサ首をさうり付

前大僧正慈園

世中あそびやくをふつたのうけ方とらりたどきとて和あ来  
倒あぬとてゆげのゆき動寺あてし久しゆきり

そのころつらあちる言れ下じりつらび若れ行かれ

影不知

大僧正慈園

うらやみ我れはとて心をむしむるをいれふちつらあちり

清原元輔

うらやみ我れはとて心をむしむるをいれふちつらあちり

久人しり次

とて心をむしむるをいれふちつらあちり

延執河時女苑人内近白馬蒔合みきりに車ふるをき

そ井のきぬとてうらやみをいれふちつらあちり

とて心をむしむるをいれふちつらあちり

女苑人内近

とて心をむしむるをいれふちつらあちり

かきいそれとてうらやみをいれふちつらあちり

とて心をむしむるをいれふちつらあちり

ほしきれい

周防内侍

かきい夕方そと小たりをせしゆれきてえすれあちり

影不知

前大僧正慈園

にまふねとせぬをいふにふんじらうかをわ我もあらむ

西新法神

かどあぬ方故もむろをりういようか獲ていふるをり来なり  
をろつろろのひくぬをせしてはとほはら<sup>う</sup>し井乃思ひ  
少く月とてつら方にしとろをむきつろろ今をふいぬをよ  
うをがれ人のとこいようい出てとろとや強しをいひしと  
守覚法親王十首よりうをせぬるに

舞蓮法神

なむあてもむういぬをせりもろ方とせられうむろ強  
迷懐乃つとよなり

あはうまはのいさゆをうまむいゆいぬもむとゆか

前入僧正慈念

そふとゆはなふ人をいさうとゆとぬとれぬ袖をぬろ衣  
いすろくぬあしとやあしとんう首ぬれぬ方た文着乃を  
うらだてせにうろ方あいあゆもゆぬとらあをねえる  
和奇<sup>し</sup>あゆく迷懐乃を

山里にらきり一唐やあまぬをいさむとたぬ思ひとら

右束門普通具

袖よしくぬをばあしとろとせあれゆ月やととろは  
定家<sup>の</sup>物



馬代よ何と云ふふとむらとのめくともて行かむと

家隆朝臣

大なる地乃福之のちうに事を志とを、おろむと行ふと  
和らるうやたきの塩あいのうし出つたれ我身のみを  
我の山とらぬ月を枯風えとむら神と病と事と

雅治朝臣

馬代よあつはら此の福とむらとはそのまはめつを  
皇女を宮と文後女

行むも涙小月をむらと事とあつたれ秋とらうと

子音番う合よ

攝政左政大臣

うけつて世にそとをいふとてふよこしてさるる縁あり

影不知

我のうをりそととてぬれそと道ぬせり又いこ  
とが命と物をむらとあつてとてむらと事と

馬代よあつはら此の福とむらと

守貞法親王

馬代よあつはら此の福とむらと

持中細玄慈宗

世に接るをたはれそありけりうれとてはと事と

迷憶のやと務ゆる

左近中将云衛

すて御ぬつり身そほしき素よりそよ思をよみりまきりて

歌一十首

久見人あし次

うれあつて望はあつせよふらふあふあふとつてあふあふあふ<sup>てい</sup>

源仲光

長なる程やもろく余かのりれ世とそえたのこまけい

賀茂重保

あつたあつたのそりれあつたあつたあつたあつたあつたあつた

荒木田長延

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

入道あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

形への頼輔

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

歌一十首

大信都寛辨

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

藤原行能

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

鴨長明

乃建平のついでに海をあらわすふらふらしてふらふら  
影不知

源季景

なまじくあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

西行法師

はやくあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに  
月の中へあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

卒首草中ふ 前大僧正慈園

思ひあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに  
ふらふらしてあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

西行法師のついでに海をあらわすふらふらしてふらふら

月日はあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

うきうきとあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

前僧都金真（建長三年）のついでに海をあらわすふらふらしてふらふら

孫仁の親王

人言源氏のついでに海をあらわすふらふらしてふらふら

お大僧正慈園あまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

ふらふらしてあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

前右大将頼朝

からあまのいかにあまのいかにあまのいかにあまのいかに

あま

辛未の春の歌を  
久比岐云

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

題あり次  
皇嘉門院

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

清慎云

道一の歌よけりて我れはははははとて

権中納言資實

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

松のやうな海をたへて性空上人

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

題あり次  
後頼朝臣

かすみのとふすのたけのうらたけのうらたけのうらたけ

皇太后宮大夫俊成

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

春日社新合よ松風といふは

家隆の臣

かすみのとふすのたけのうらたけのうらたけのうらたけ

皇秋門院丹後

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

春の光を人ぞ歎く言ふ事ありては此の歌ありては

女河内子女王

又取のそび来てあつせ申ふまはるゝあつせふん  
明時念志舞人あつせふんあつせふん  
一そつら来り目けつら一きり

実方初後

衣より履きつるあふけつら  
せつら  
道信初後

いあつせのやみしつるあつせつらあつせつらあつせつら  
後冷泉院つ時大寄會よいけつらあつせつら  
実方初後あつせつらあつせつらあつせつら

いそつらあつせつらあつせつら

加賀丸来門

そつらあつせつらあつせつらあつせつらあつせつら  
秋の来きつらあつせつらあつせつらあつせつら  
あつせつらあつせつらあつせつらあつせつら  
あつせつら

天曆師奇

あつせつらあつせつらあつせつらあつせつら  
秋雨と  
中務の具平親王

あつせつらあつせつらあつせつらあつせつら  
あつせつら  
小野小町

年うりの風ゆをみりの今事候うささし葉のほり葉  
速懐百首うえけりこれ紅葉と

皇太后言大文俊成

風吹をこれ紅葉のほり葉とをうくあゆむあさる

詠しう歌

崇徳院四哥

うた舞にき吹風よあけしを紅葉あらしむる時

文内卿

竹の葉の風さよふたれあをれ秋ら

和泉式部

夕葉は雲かきしむるあけしを紅葉と

くれぬをいふはかきしむるあけしを紅葉と

西行法師

まを穂つるあけしを紅葉と葉あすあけしを

暁乃心をよめる

皇太后言大文俊成

あけしをいふはかきしむるあけしを紅葉と

百首うえ

式子回親王

あけしをいふはかきしむるあけしを紅葉と

后よあけしをいふはかきしむるあけしを

和泉式部

かきしむるあけしをいふはかきしむるあけしを

新しう次

そら糸のいとち物とてさぐくもめいふまに  
熊野へとらて大幸いんをせしむる  
そひとてゆけりあはれものこいつら

久保正行尊

新とてとらとてさぐくもめいふまに

百首あまもり時 大所門由大臣

くわ山籠とそり糸の理とまこととてたよ  
百首歌うもゆあり小塚田

皇太后言又後成

むらた糸音とむいりそら糸の理とまこととてたよ  
迷懐百首うもゆあり小塚田

後頼朝長

ゆふのいとち物とてさぐくもめいふまに  
夕ふれゆもものいとち物とてさぐくもめいふまに  
毎とてさぐくもものいとち物とてさぐくもめいふまに

僧正遍昭

ゆかあのをいしとてさぐくもめいふまに  
新不知 西宮大長

むらた糸音とむいりそら糸の理とまこととてたよ  
野分とてさぐくもものいとち物とてさぐくもめいふまに

今

新澤本門

何れ吹風をいふと女を好むに蘇るふと人の心  
和泉式部より作らばよとて後につらむとて教道  
親王かうとてまてはつらとてまら

也

和泉式部

特風守の如くも高きものうかたふもふとて思ふ  
今すいなりぬはゆいゆきり付定ぬ物に中将テニニ  
ふいふとて氏人の範亮のそとにけりつとてまら

皇太后宮大夫俊成

と藤ら風まの寄来をなしてころ一婦とてむいふか

物とて次

前大僧正慈海

右中といゆものむけくうふとて女とてむいふか  
世にいふものありたりとていふとていふとていふ  
むとていふものありたりとていふとていふとていふ  
かふとていふものありたりとていふとていふとていふ  
思ふものありたりとていふとていふとていふとていふ

西行法師

右中といふものむけくうふとて女とてむいふか  
世にいふものありたりとていふとていふとていふ  
かふとていふものありたりとていふとていふとていふ  
思ふものありたりとていふとていふとていふとていふ





秋の夕方、此物よきとて、いふたはあふ、世はもろく

法橋新編

そのつらりして、まの事とまゝに、あつらひ、月日とあつらひ

古堂法親王十首よりよませゆきりふ

源仲光

ちかて、ちかて、作ふとて、いふたはあふ、世はもろく

野ら奇 八條院高倉

うきと、いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

西行法師

あつらひ、あつらひ、あつらひ、あつらひ、あつらひ、あつらひ

外

法橋新編

ちかて、ちかて、ちかて、ちかて、ちかて、ちかて

案連法師、いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

西行法師

いふたはあふ、世はもろく、いふたはあふ、世はもろく

外

千載集よりいゆるるに方の人、此方と云

皇太后宮大夫俊成

幼未、我とを思ふ人、あつむ昔をさうりて、後をいひ

宗徳院より百首ありて、はるき海を言ひ

在中とて、はるき、後をいひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

百首あり、式子内親王

く、新まも、幼とを思ふ人、あつむ昔をさうりて、後をいひ

はるき、あつむ、さうりて、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

花山院沙弥

はるき、あつむ、さうりて、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

新あり、次

中務卿具平親王

風を、秋の葉、よに、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

蟬丸

蝉を、よに、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

世帯、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ、さうりて、いひ

あつむ

新古今和歌集卷第十九

神祇歌

あつちもやまの神はひらひらに松はひん末まてとあつち  
こゝろの日は社司社人のうへに山の中はうらみ  
してゆきゆく車人の暮よみもきふとあつち

かきつけくはらう人けり我宿のあつちゆきぬ梅のまね  
あつちの建久二年のまねにうけくふとけりうら  
もはく安樂寺の梅をけりてゆきゆく車人の暮よみ

あつち

あつちのまねのまねにうけくふとけりうら

こゝろの無福寺は南園堂にけりうらあつち  
春日のえれをうらめしうたなまのまねをゆき  
あつちのまねをうらめしうたなまのまねをゆき

あつち

伊のほろ年のまねのまねにうけくふとけりうら  
こゝろのまねのまねにうけくふとけりうら  
あつちのまねのまねにうけくふとけりうら  
あつちのまねのまねにうけくふとけりうら

あつちのまねのまねにうけくふとけりうら  
伊勢物語は伊勢小納言にうけくふとけりうら

まいてとちりきり

人重源のまやくこらよゆゆれりあつたを悉く下をまて  
あつた寄八待賢門院城河やまてあかてら然野へ  
申うてゆるりふかすくさつら色さうく此後と  
乃そりやれとけりよまといひしとなしとかりと  
まよきゆとかりゆるきゆに鏡<sup>多</sup>面<sup>多</sup>のまじつらと  
ちんじ

道と御のまを致ゆてこけりなむいよせ我を四れ  
こ此寄八陸奥ふすらんもろくのくは三年ま  
てむと致とすそなつらゆるきつらつらつら

一からまれの御にこいよらぬまじつらとま

一ゆつとらるる御のまなりんはまのやまん  
にま御事力よつまるゆてかかすれのまよひとあふ  
いふのまれまのまらるる御のまてあつたのま  
かむむとこいそらきつらんかまの御事よ御事  
てゆるりゆるりふかすもあつた

且後そのひんといふにあつたを雲あてのあつた  
賀茂の四寄とせん

かみあもつたまら此水のまよつたはりのまをゆ  
い道とよかあゆつたまら人のまよつたまら



神風やみもすそはありしはふらびりしとれ事となふお  
たのしきれお交よそよとゆるき

藤原定家御筆

契ありてそよ高月の中よりくわんをまをわけたるまむ  
公ナリ継に物使めく去神爰よ海うてくるるりのありゆる  
よ秋宮乃女房の中らととらけり

よと人たのし

う積りも何とれもいふゆとすしゆる人よととれお  
やー 春宮権大女云継

神名やいそ河のながさく流とじこみふふ又わたりこむ

大神家此方の中ふ 大上と皇

そりあとも神り乃山よ雲来して夕れを母いてむ月ふ  
神風やこよそてくりにあひくそてひくあつとい海を折  
頭不知 西行法師

まをく産をくひいふね母を乳そく露をくりぬはの影お  
神り山月あゆむらうしありて下よはてく流なるまら  
伊勢乃月よ久れ毎乃母りりて月とみよある  
あや好りけりよ子の雲わら影やうらつ力うこら枯  
神祇あよそよ久れゆるり

前大信正慈園

やほしく酒光よあまの秋の事やいともかろし秋の朝乃月  
ふ柳枝は<sup>まき</sup>はかぬりゆきりふしりしつじま光  
ふとゆきり  
中院入道右大臣

まの魚り又もみまきれりしとねみもすそはゆげはる浪  
入道前宮白家百首より九の望より母

皇太后太后太后太后

秋風やいとし川のまきりらつく世とあしたん  
後惠法師

神をむくくあまの葉ととりかろしうらに秋の事とく  
平首よりなりし 越前

秋風や田のうらに柳葉よあつとあはれけぬ日そあま

秋の池原より事と 大中臣明親

いとしそやまきれはねのちとととぬの柳の夕を  
香榊家の秋より九の望より

鏡人不知

らよあまの秋の事やあまの柳のみに秋の事とあま  
八幡家の推官より年いしかりきりしと秋の事と  
以秋の事とあまの秋の事とあまの秋の事と

法平成法

柳葉よ秋の事とあまの秋の事とあまの秋の事と



賀茂よきりて 因防内竹

年以てうれしむのこそは此か所よかき男と不  
文治六年女河内内屏風は臨時系かきり  
竹やう

皇太后太后大文儀成

月とやうさし河内新めて少きわつ山あのみ神  
社取寄といぬら終とよと竹き紙

按察使云通

望きてあ風まらうとて所て意あらぬ中寄るは  
十首う合の中小神紙とよらり

前大僧正慈念

志越はつたをきと人こくたはとのまのあけ乃玉か来

みあしよこしりて御しははつとよれくあむとら

賀茂重保

秋を折神よあしいのまりせあはらとてしては紙は

社目ともきし終は海りてあさしと竹きりは折て

賀茂幸平

に海と田ははつたをりを紙けはせに紙を河と乃神

鴨社あ合とて人く鏡のきりよ月を

鴨長め

石川やせんのと河は来しは月毛流と紙く凡十金

并ふ約きり時春日系よそりて因防内侍より  
くしやう

系代といかりたか海中央たを記すかの山をとおのあふ  
文治らひ女河内内屏風 春日系

入道前宮白太政大臣

や梅さつ神のちやひくらんてよ故のさあ川を  
家心百首より久約きりて神祇の心を

皇太后后宮大女御成

く下みりてあひのひのてきりてあはれあふあふ  
まの野のともうれらのひあすあふに神のちやあふ

大系時系よそりて因防内侍よしやう

藤原伊宗

あまも心そよけ紅葉いと神をきりて山をうら風  
寂膳院天皇院内侍子母とての山を記さる可

前大信正慈園

やや山神のちやうと松の系よら記りて色うあふあふ  
日吉社よまきとよけりきりて中よ三交と

あふらふあふのあふとていんそのあふとてあふ  
赤徳の心を

秋そのあふをうらあふとてあふとてあふとてあふ

とくありて日くは新くくぬ海ありて一と日白くふる  
もろ人の移しをさるの流風よ必ずしとたてしひとてか  
お野りうらふんくきそとたてりうら

こち新くしあもせく移しをたてしひくはあ人の友  
然野りまうして流ひなるはれちりよれのうらりあ  
を以流りく  
白河院法奇

まればり流のうられよみかす小祿のふそ見ふちく  
く海野りまうしてそくよとせりゆ

太上天皇

定ふしと昔よりかみ流りくはあ人のあつめをた

新交よまうりてそくよのらふん

然野りまうして流ひなるはれちりよれのうらり  
白河院まよみかすゆとせりゆ  
る乃王子よそあふんゆりうら

後徳大寺大夫

まのほつ志や乃権う風よそひくと祿のさるもさ  
然野りまうしてゆふいそるれま子いんくろ若  
かとか来しあそそくおけゆり母拜殿あけ  
く来つひくゆりうら

鏡人あうあ

いづれの神をたつらひてさうせよとてそなたの家をのり来  
るはかたきやうしてさうあらうらふ遷交のりま  
りて  
太上天皇  
契もまはらげりかたむらうふらひぬらうれ神を祀りて  
加賀のちかきゆきりてこれらふかたむらうてそらりて  
なほいとて日吉の若人のまあふりてゆきり

左京大夫顯輔

辛卯のちかきゆきりてこれらふかたむらうてそらりて  
一お殿子同親重佐吉小まうてそらりて  
ふかきゆきり  
藤原道純

任是れ海にたえよ風をけい浪のちかきゆきりて  
あつちの屏風のちかき十月神をまつて  
おつてふかきゆきり

徳宣朝臣

柳葉のちかきゆきりてこれらふかたむらうて  
延和のちかきゆきりてこれらふかたむらうて

貫之

河原のちかきゆきりてこれらふかたむらうて  
延和のちかきゆきりてこれらふかたむらうて

新古今和歌集卷第二十

釋教歌

なほそのあはれありのあはれをまもつて世にわびかたりの  
あはれ思ふあはれあけくせ中たはれあはれあはれあはれあはれ  
こゝろよまはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

智恵上人伯耆乃大山よまはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

山深くまはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

新基堂菩薩

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
比叡山中堂建立のあはれ

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

入唐時奇

智證大師

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
善提寺此禪堂のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

日蓮上人



昔はありあけの春より来りて十九日暮の月影の影をうらむ

迷懐の言中小 前大僧正慈雲

移りけりてさうらふらにやとていかにやせまはせりて

こみせりきく此白雲らんを流るはとちて来んを何れ也

極まもてわが心中さほつとていかにのあやとさうらま

観心如月輪若在観心 觀霧中乃云を

於僧正云流

我を方候とまふぬ秋勢よやあふふ久中あめ月

家小百首言ふ久竹けりて十家のをと久竹を

ふゆ縁覚れをと 攝政大臣大臣

む山あひりては海はうらふとさきあはれ風よきうりて

心細りふとよあり 小侍臣

あふつとせりやのうらふとていかにさけりてうらと

攝政大臣大臣家百首言ふ十樂をよと久竹を

聖衆来遊示 案蓮は仰

しつとれの雲らふとせりあつとつとよとせとてあはれ風

蓮華初開樂

こ徳やこけりて春乃のうらむのさかればゆかろと

惺樂不遊示

春物をかきとぬむとて露はなとてさかればゆかろと





はつ清きつ母もあはれいなきはつわが世の命と信え  
はつ清き加刀杖瓦石念佛安應悉乃公と

宋蓮法師

ふくまの世の命と信えいなきはつわが世の命と信え

九百才子

内秘善薩行の巻

前大僧正慈園

ふくまの世の命と信えいなきはつわが世の命と信え

人々

二家

智如螢火

宋蓮法師

道徳の世はつわが世の命と信えいなきはつわが世の命と信え

喜蔭清涼月 遮打畢竟空

雲とれはつわが世の命と信えいなきはつわが世の命と信え

梅檀香風 境可衆心

吹風よ我をわが世の命と信えいなきはつわが世の命と信え

作是教已 徼之他國

此日已 命即衰滅

悲鳴咽痛慈本群

素質法師

素質法師

草庵うきかりとれよのを立出てこそ海とせむる麻呂  
飛思入言為 寐然法師

えびつとは、ははるをせむるありひてさびりよ  
合會者別離合 源季廣

あじふくを願よわくをせむる海をありて  
野名野 寐然法師

是にきくまうりつり作され松すん地と公はり  
心懷戀慕 渴仰渴 於佛

別あ世のなりけの起りまに夢もてよ山乃月  
十戒より久徳もろふ 不鮮生戒

やの海ありきいどいびりせりてよのいあり  
不偷盜戒

ら此まれいと染たりとえ飲すむいあひそ無淨  
不邪淫戒

いぬふふいりつるのこよ衣のほはあぬつふあ  
不酤酒戒

花のれと染れあひけり毛をりあしあすめを  
入道前冥白痴冥 十心気ありまを徳芳に如是如

二條院 積波

夏元夏 ねむりあひとあはれふふ世をうきえ



若や中よりや夏とわが秋のりかたのさあじはん  
二月十八日の著るくに侍勤太輔のをしにうらむ

お模

言ふも色々の輝のたらしをぬもさゆふ思ひをらん

侍勤太輔

言ふも色々の輝のたらしをぬもさゆふ思ひをらん

西行法師とよしのゆき方にゆるるさうへいあまう

てあまの月あまのまげのゆきのまよふゆきのま

あまのまてはゆきまよふ

侍賢の院城川

水の中より夏とわが秋のりかたのさあじはん

西行法師

言ふも色々の輝のたらしをぬもさゆふ思ひをらん

人の身ゆかり小言るれり結城経信長しけり

即往安樂世叟の言をよめる

贈西上人

昔や月乃光とさるふあまのさあじはん

観心とよしのゆき方に

西行法師

言ふも色々の輝のたらしをぬもさゆふ思ひをらん



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

